

自衛隊 海外で災害救助を



60年生まれ。学生時代に国際交流団体ピースポートを創設。96年に社民党から初当選。2011年に民主党に。

つじもと
きよみ
辻元 清美さん

衆院議員

「過去の戦争を見つめ、未来の平和を創る」と掲げ客船で世界をめぐるピースポートを1983年に始めました。

92年には自衛隊が国連平和維持活動（PKO）に送られるカンボジアにも支援物資を届けた。当時は変わりもんに見られたけど、今は海外での人道支援への評価が定着し、NGOなどに関わる若者やシニア、特に女性が増えました。日本にいてもフェアトレードで途上国産品を適正価格で輸入したり、電気がなくても

夜に勉強できるソーラーランタンを安く輸出したり。民間では、この30年で国際支援の意識が大きく広がりました。

なのに政府は、91年の湾岸戦争以来の国際貢献コンプレックスから抜けきれない。とにかく大国として自衛隊を出さないと世界から取り残されるみたい。PKOへの派遣もずっとそうでした。

施設部隊を出して道路や宿営地を造るのは日本の特技ですが、自分たちだけで作業する大部隊は地元で雇用を生ま

ず、技術も伝播しない。南スーダンの自衛隊の派遣先で昨夏に大規模戦闘が起きると、そうした危険を冒してまで道路を造らせる意味を政府は説明できなくなりました。

この国際感覚のずれは海外で活動する日本のNGOにとっても深刻です。私は92年、カンボジアで借り上げたバスで移動中に、武装勢力に止められた。護衛の民兵もいたけれど制止し、私と通訳で交渉して事なきを得ました。駆けつけ警護をされたら撃ち合いになったかもしれません。

民主党に入党した2011年、野田内閣が南スーダンPKO参加を決めました。疑問を持ち続けていた私は昨夏の戦闘後に撤収を主張。先月、南スーダンから部隊が無事戻ってよかったという思いで防衛省での式典に出ました。紛争当事者が混沌とする最近の

PKOで、駆けつけ警護までして参加することが真の支援になるのか、今後、費用対効果も含め検証すべきです。

陰湿なテロが増え、人道支援の現場は厳しさが増えています。だからこそ、地道に積み上げる漢方薬のような日本の手法が必要です。菅内閣の首相補佐官として、自衛隊とは東日本大震災で地震、津波、原発事故が重なった過酷な災害対策をやり、ボランティアとの連携にも努めた。その経験から提案したい。

自衛隊を海外で本当に役立つなら災害救助に送るべきです。スキルを高めれば日本でも役立ち、国民の理解も得やすい。自衛隊員や外務官僚は世界のNGOに出向し、人道支援の経験を積む。現場では武力よりコミュニケーション能力が重要なんです。

四半世紀の国際貢献コンプレックスを脱却し、現地ニーズに合うしなやかな支援を、市民やNGO、政府の文民、自衛隊と一緒に考えていきたいですね。（聞き手・藤田直央）